



第79回卒業証書授与式

3月13日(金)に、「第79回卒業証書授与式」を挙行政いたしました。晴れやかな空の下、保護者や来賓、在校生に見守られ、3年生171名が本校を巣立っていきました。卒業生の皆さん並びに保護者の皆様、ご卒業おめでとうございます。9年間の義務教育を修了し、これから自分で選んだ高校、そして社会に進んでいきます。これまでの学びや経験、人とのつながりなど自分で獲得したものをフル活用し、新しい環境で自分らしく花を咲かせてほしいと思います。私たちはいつまでも、卒業した皆さんの幸せを願っています。



生徒会黒板



3年1組



3年2組



3年3組



3年4組



3年5組

別れのことは
旅立ちの春を迎え、グラウンドを渡る風にも、柔らかな日差しが輝き始めました。このようなかすかな春の訪れを感じる今日というこの佳き日に、私達卒業生のために、このような盛大な卒業証書授与式を挙行政していただき、心より感謝申し上げます。
思い返せば、私達の入学式は、しとしとと降る雨の中ででした。期待と緊張で迎えたあの日、頼もしい先輩方や温かい先生方に迎えていただき、中学校生活への決意を胸にしたことを懐かしく思います。あれから三年の月日が流れ、私達は、数え切れないほどの経験と出会いを通して、多くの学びを得ました。その歩みの中で、これからの人生においても、心の支えとして大切にしていきたいことが三つあります。
一つ目は、伝統を紡いでいくことの大切さです。体育大会では、先輩方が長い年月をかけて磨き上げてこられた演舞や、一切の妥協を許さない団結力を、私達は肌で感じ、受け継いできました。そして、私達が挑んだ最後の体育大会。これまでに受け継いだ伝統の全てと、仲間たちの熱い思いに、空に響き渡るような力強い応援バフォーマンスを披露しました。あの瞬間、会場全体が一つになった高揚感は、一生忘れることはありません。また、総合的な学習の時間には地域課題を通して「時津」の歴史を、修学旅行では日本の文化を学びました。伝統とは単に受け継ぐだけでなく、先人の思いを理解し、自分たちの手で新たな価値を加え、次の世代へと手渡していくものだ」と実感しています。
二つ目は、恐れずに挑戦し続ける勇氣です。私にとって中学校生活最大の挑戦は、選挙に立候補し、生徒会長になったことです。就任当初は、責任の重さやプレッシャーに、足がすくむような日もありました。しかし、いざ活動が始まれば、そこには共に悩み、意見を出し合える最高の仲間がいました。生徒会スローガンである「意心」のもと、全員で一つの目標に向かって取り組むことの楽しさ、そして、自ら動くことで景色が変わっていく喜びを知りました。生徒会長として駆け抜けた日々の中で得た発見は、私の人生の財産です。三つ目は、私達を支えてくださった存在への限りない感謝です。
在校生の皆さん、これまで学校行事や部活動において、共に切磋琢磨し、たくさんの思い出を作ってきましたね。皆さんがいてくれたからこそ、私達は「先輩」としての誇りをもち、背中を見せようと頑張ることができました。私達を信じ、ついてきてくれる皆さんが、失敗を恐れず、この恵まれた環境で多くのことに挑戦してください。

令和八年三月十三日

卒業生代表 ○○○○

先生方、未熟な私達を、時に厳しく、常に温かく見守ってください。ありがとうございます。どのようなくとも決して見放すことなく、真摯に向き合ってください。先生方の優しさに、どれほど救われたか分かりません。先生方が授けてくださった教養は、私たちが迷った時の大切な道標です。いつの日か、先生方のように、誰かの背中をそっと押してあげられる大人になれるよう、自ら選んだ道を力強く切り開いていきます。
そして、お父さん、お母さん、十五年間、どんな時も見方であってくださりありがとうございます。私が十歳の時に二人が贈ってくれた手紙にあった「生まれてきてくれてありがとう」という言葉。今なら、その言葉に込められた深い愛情が分かります。二人から溢れるほどの愛をもらって、今日まで幸せに育つことができた。本当にありがとうございます。四月からは新しい環境に身を置くことになりましたが、自立し、自分の足でしっかりと歩き出すまで、あともう少しだけ見守ってください。
最後に、共にこの三年間を駆け抜けた三年生のみんなへ。みんなとは、数え切れないほどの思い出を共に作ってきました。とにかく笑って幸せに満ち溢れた思い出も、悲しさや悔しさで涙した思い出も、すべて良いものだったと思います。自分たちで悩み、決断し、全力を尽くしたという事実は、何物にも代えがたい「成長の証」です。この学年の一員として、皆と共に歩めたことを心から誇りに思います。
平安時代の歌人、紀貫之はこのような歌を詠みました。
「今年より 春知りそむる さくらばな
散るということは ならわざるなむ」
咲き始めたばかりの桜に「散る」ということを覚えてほしくない」と願った歌です。別れを惜しむ私達の今の気持ちと重なります。しかし、桜は散るからこそ、次にまた見事な花を咲かせることができます。私達もまた見事な花を咲かせることができます。失敗したり、立ち止まったりするかもしれませんが、この三年間で沢山の力を身に付けた私達なら何度でも前を向き、咲き誇ることができると信じています。卒業生一人一人がこの時津中で身に付けた力を信じ、何度でも前を向いて歩いていくことを誓い、別れのことはといたします。